

日本海主要底魚類の生物的特性における海域差とその形成機構

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010133

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



日本海主要底魚類の生物的特性における海域差とその形成機構

日本海区水産研究所 日本海漁業資源部
海区水産業研究部

研究の背景・目的

- 太平洋などの外洋と比べると種数は少ないものの、日本海の水深200mより深海の全域に生息する底魚類の多くが漁獲対象資源として利用されています。
- これら底魚類は日本海という閉鎖的な環境に生息することから、多くの種で日本海全域を一つの資源単位として資源評価を行なっていますが、近年、同一種であっても地域によって分布や生態、資源の変動パターンに差があることが明らかになってきました。
- これらの海域差の実態を把握するとともに、どのような要因で海域差が形成されているかを明らかにすることによって、資源評価の精度向上をめざします。

研究成果

- ベニズワイを主な対象として日本海各地で底びき調査を行った結果、漁獲サイズ未満の小型個体は水深1700~2300mに高密度に分布し、成長しながら漁場である水深1500m以浅に移動するという特性が見られ、このことは日本海全域で共通してい

ることが示唆されました。一方、成熟サイズや成長には海域差が認められました(図1)。

- ツ바이は、日本海本州沿岸で1,000~1,200トン漁獲されているエゾバイ科巻貝の中でもっとも分布域が広く、一部の海域では未利用資源として注目されています。しかし、能登半島以北と能登半島以西のツバイを比較したところ、成長や成熟サイズに違いが認められました。DNA解析の結果、能登半島以北と以西では異なる系群であることが明らかになり、このことが海域差の一因であることが示唆されました(図2)。

波及効果

- 本研究課題の成果により、日本海全域という一括りではなく、科学的根拠に基づいて区分した海域ごとに資源評価を行なうことが可能となります。
- 海域差を生じる要因を明らかにすることにより、地域ごとの成長や成熟サイズに見合った漁獲規制を検討するといった、地域の資源状況に即したきめ細かい資源管理の方策を提言することが可能となります。

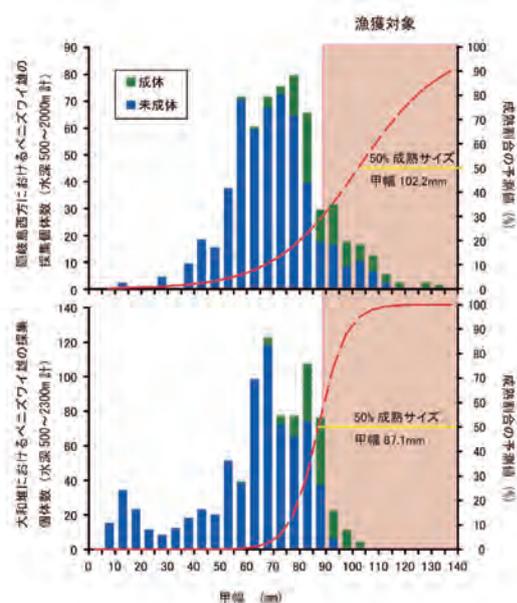


図1. ベニズワイの甲幅組成とサイズ別成熟割合。(上段: 隠岐島西方, 下段: 大和唯(日本海中央部))



図2. DNAによる、日本海各地のツバイ(写真)及び近縁種についての集団解析結果